

# かくれキリシタン ～「弾圧と潜伏」の時代に 「信じる心」が生み出した奇跡～

今なおかくれキリシタンの伝承が残る長崎県生月島  
(いきつきじま)。この島のかくれキリシタン行事に実際  
に触れ、音楽の持つ力の大きさを再認識した。

小泉 優莉菜  
(演奏学科声楽専修〈音楽学研究コース・  
声楽コース〉平成22年度卒業)

## 「かくれキリシタン」

多神的な日本では八百万の神々が祀られているが、その中に「かくれキリシタン」を信仰している人々がいる。かくれキリシタンという歴史の教科書に出てくる話のように思われるが、21世紀になつた今でも存在し、その信仰行事が続けられている。

かくれキリシタンはキリスト教と深い関係性を持つ。1549年にイエズス会士のフランシスコ・デ・ザビエルによつて伝えられたキリスト教は、織田信長や、キリシタン大名達の後押しもあり日本国内に広まる。しかし、1587年に豊臣秀吉によつて発布された「伴天連追放令」を皮切りにキリスト教弾圧の歴史が始まる。

江戸時代に入り、徳川幕府の政策はとてども厳しくおこなわれた。それでも信仰を続けた者たちもいる。彼らは幕府の目を逃れながらも信仰を守り、「潜伏キリシタン」となった。そして明治時代に禁教令が解けた後も、キリスト教に合流せずに信仰を続けた潜伏キリシタンの末裔は「かくれキリシタン」と呼ばれた。

潜伏・かくれキリシタンの伝統は現在では主に長崎県の生月島や

外海地方、そして五島列島に息づいている。

## 生月島と外海・五島

長崎県のかくれキリシタンは生月島での信仰形態と、外海地区と五島列島での信仰形態で大きく二つの形態に分けられる。歴史的な理由から両者の信仰形態の異なりが生まれたのだが、詳細は今回は割愛する。大まかにいって特異なるのはつぎの二点である。

### ①崇拜の対象

生月…主に納戸神<sup>\*1</sup>

外海…主にマリア観音像

### ②おらしよ

生月…旋律あり

外海…旋律なし

## おらしよ

前項で「おらしよ」という言葉が出てきたが、それは一体どのようなものであるか。

おらしよとはラテン語のOratio(祈り)に由来する言葉である。元々ラテン語で唱えられていた祈りの言葉が、潜伏時代に宣教師のいない中で行事を執り行なわなければならないため、変容したのである。さらに信仰の存在が外に漏れることを恐れ、おらしよを紙に書き写すことを禁止し、口

頭伝承のみをおこなってきた。そのことも変容の大きな理由とされる。現在でも文字化はせず、暗唱を基本とするが、後継難などの問題から、文字化も容認されている。

生月島のおらしよには旋律のつく「唄おらしよ」が存在する。また、皆川達夫氏の研究により、旋律はスペインのローカル聖歌に由来することが明らかにされた。唄おらしよのうち、「らおだて」「なびよう」「ぐるりおぎ」の三曲が今も歌い継がれているが、それぞれ「Laudate」「Nunc dimittis」「Gloriosa」の変容した姿である。

私は、二年来に履修した音楽文化論において、このような文化が日本国内で存続していることに驚き、研究テーマとして取り上げた。次項では現在までに分かったことについて記したいと思う。

## 生月島・壱部地域での

### 信仰の様子

私は2010年に三度、信仰行事に立ちあう機会を得た。生月島に行き、まず驚いたことは、一軒で祀っている神の多さである。私がお世話になったのは、かくれキリシタン組織の中でも「ツモト」<sup>\*2</sup>と呼ばれる川崎雅市氏のお宅である。そこには納戸神だけではなく、左



納戸神(御前様)  
2010年9月4日撮影→



↑納戸神の前でおらしよを唱える  
かくれキリシタンたち2010年  
5月5日撮影

から「御大師様」「御仏壇」「納戸神」「神棚」と、なんとその部屋だけで四種の神々が祀られていたのである。禁教時代、幕府は「寺請制度」というものをつくり、民衆はすべて檀家か氏子となるよう義務づけた。かくれキリシタンは表ではその制度に従い、その実、裏では信仰を続けるという二重の信仰生活を送るようになったのである。つまり彼らはかくれキリシタンであり、仏教徒・氏子でもあったのだ。川崎家のように複数の神を一軒で祀っているのはなら珍しいことではないようで、川崎氏以外のかくれキリシタンに尋ねても、同じようだという。

から何度も十字が切られるが、この十字も平素私たちが目にするようなものではない。かくれキリシタン独特の親指で何度も自分を指し示すという作法で切られる。おらしよは約40分間休みなく続けられる。一人で行事を執り行う際などには現在では書き記したものをしながら唱え上げるが、基本的にはそれをすべて暗唱するというのだから驚きである。

川崎氏に「おらしよを唱えている時には何を考えているのか」と聞いたことがある。氏は「一心になつて自分の唱えるおらしよに集中している」と答えた。その言葉は私たちが音楽を奏する際も心がけるべきことなのではないか、と私の心に深く響いた。

### おわりに

厳しい弾圧時代を耐え抜き、現在まで続いてきたかくれキリシタンだが、この50年間で組織の解散の変化や生活の変化によって、信仰の継承が難しくなっている問題が大きく関係している。かくれキリシタンたちの中でも、「無くなつてしまふのは悲しいが、若い世代に強制は出来ない」という考えを持つ者が多数である。

### 参考文献

- ▽片岡弥吉「長崎のキリシタン」聖母の騎士社、1989（未所蔵）
- ▽竹井成美「南蛮音楽その光と影」音楽之友社、1995（請求記号●O6-129）
- ▽浜島書店編集部「日本重要史料集 浜島書店、1989（未所蔵）
- ▽皆川達夫「洋楽渡来考」日本キリスト教団出版局、2004（請求記号●J13-515他）
- ▽宮崎賢太郎「カクレキリシタン―魂の通奏低音」長崎新聞新書、2001（AG）
- ▽津田塾大学・国際基督教大学所蔵）
- ▽松田毅一監訳「十六・七世紀のイエス又会日本報告書 第3期第6巻 同朋舎出版、1991（請求記号●J74-366）
- ▽平戸市生月町博物館・島の館「生月島のかくれキリシタン」平戸市生月振興公社、2000（未所蔵）

\*1 納戸神は生月島かくれキリシタンにおける最高神であり、通常は掛け軸に人物（キリストやマリアと思われるもの）が描かれて描かれているのは分かっていない。

\*2 生月島のかくれキリシタンでは本部組織と支部組織の二部構造となっており、本部は神様を祀っているソモトで、最高役職であり、いわば教会の役割をしている。

●こいずみ ゆりな かくれキリシタンが大好きです。愛してます！そしてお世話になった、横井雅子先生、塩田美奈子先生、音楽学の先生方、かくれキリシタンの関係者の方々に改めてお礼申し上げます。